

エスペラント朗詠短歌通信添削 (8)

前田茂樹

エスペラント朗詠短歌募集要項

- 1、一人二首まで
- 2、匿名可
- 3、テーマ自由
- 4、日本語で短歌の意味、もしくは原文の日本語の短歌を添える
- 5、あて先 ノーバ・ボーヨ編集部
〒 621-8686 京都府亀岡市天恩郷大本本部内
FAX 0771-25-0061 e-mail officejo@epa.jp
- 6、作品は添削後誌上で発表

作品 A

Por mortdatreven' ,
centjara de Zamenhof,
en Ceremoni'
por laborego brila
ni oferas honorojn.

<解説> 最後の行を除いては朗詠短歌の基本リズムに問題はありません。これについては後で触れます。さて、まず作者本人もコメントしていますが、一行目の mortdatreveno の morto と datreveno の組み合わせは少々相性がよくないようです。Datreveno は dat' re' veno で、ある記念すべき出来事の起きた日が (定期的に) 巡ってくるという意味の単語です。大本で言う 10 年祭などの霊祭を表現するには、「～から何年目のみ祭り」という言い方をしなければなりません。例えば、la 100-a datreveno (ek) de la fondiĝo de Oomoto (大本が開教してから 100 年目) のように前置詞 de を使って表現するのが普通です。Datreveno の頭に morto を付けると、morta datreveno (死の記念日) ということにな

り、違う意味に受け取られる可能性があります。一行目は、por を en に変え mortdatreveno の mort を削除して En la datreven' とします。問題は二行目ですが、本来は centjara の後に、「昇天後」にあたる句を置きたいのですが、音節の数がうまく合わないため、de zamenhof の前に komo を置きます。そして、三行目を削除して、「昇天後」にあたる ekde l' ĉielir' を置きます。

さて、四行目、五行目ですが、冒頭で触れたように、最後が弱い音節で終わっていることと、ni oferas honorojn という表現に少々問題があるため、四行目と五行目を入れ替えて考えて見ましょう。まず、ザメンホフ博士の功績に敬意をあらわすという意味ですから、honoro を動詞で使うほうが作者の意向に近い表現になると思われます。そして、五行目の最後を laboreg' とすれば強音節で閉めることができます。

参考例

En la datreven'
centjara, de Zamenhof,
ekde l' ĉielir'
mi kore lin honoras
pro la brila laboreg' .

作品 B

En la juna ĝerm'
mi trovas montsakuron
blanke floras jen
ugviso pepas ankaŭ
sub aprila milda sun' .

<解説> この作品は、桜の花咲くころの長閑な風景を詩にしています。一行目と二行目は、作者がある桜の花の若芽を見て、それが山桜の芽であると発見する、この詩句からはそう理解できます。ただし、問題は三行目の blanke floras jen という詩句です。これが二行目から続く表現なのか、あるいは主語が別にあるものなのかが

明確ではありません。もし二行目から続く表現であるとする、主語は *juna ĝerm'* ということになり、「若芽」と「白く咲いている」という両者の表現には矛盾を生じます。また、ほかに主語があるとしても文の中に反映されておらず、それに三行目のたった五音節の中で言いきることは困難です。したがって、なぜ山桜の芽であると作者が確信を得たのか、その情報が三行目に来る必要があります。この場合、*juna ĝerm'* の代名詞が必要となります。日本語やポルトガル語と異なり、エスペラントでは主語・述語（これに準ずる語）をはっきり明示しなければなりません。

En la *juna ĝerm'*
mi trovas *montsakuron*:
ĝi ekfloras jam.

こうすれば、若芽が少し開き始めており、その姿から作者が山桜であることを直感したと解釈できます。四行目の *ugviso pepas ankaŭ* の *ankaŭ* の使い方について一言。この語は基本的に修飾したい語の前に置かなければなりません。英語の影響で後ろに置く例にときどき出会うことがあります。ザメンホフ博士は、*li ankaŭ* や *ŝi ankaŭ* など人称代名詞のみに後置した例が見うけられます。ここでの四行目は、弱い音節で始めなければなりませんから、二音節の語が使えないため最後にもって来ざるを得なかったのだと思います。が、今までの詩句の内容を考えると、この行で *ankaŭ* を用いる表現が適切であるとは思えないので、ここも四行目と五行目を入れ替えて、詩句を構成します。

Sub la *aprila suno*
jen ugvisa ĉarma kant' .

これで少し表現が落ち着いたように思われます。

参考例

En la *juna ĝerm'*
mi trovas *montsakuron*:
ĝi ekfloras jam.

Sub la aprila suno
ja ugvisa ĉarma kant' .

作品 CD は紙面の都合で解説を省き、添削後の筆者の参考例のみを掲載させていただきます。

作品 C

Ho! Vasta kaĝ'
ruĝverta gruo para
pikas nutraĵon;
ni aŭdas la klakvoĉon!
Park' en Okajama.

参考例

Jen la paro de
ruĝverta gru' bekmanĝas
en la vasta kaĝ'
kun klakoj tre intime
parke en Okajama

作品 D

En Tenonkjoo
maleas ĉarpentisto
trabon kun kriad'
respondas homoj voĉon
ekstarigas nova dom' .

参考例

En ceremoni'
de l' lev' de filstotrabo
frapas ĉarpentist'
malee kun kriad':
Nova Dom' en Tenonkjo.